様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 ２１ 日現在

機関番号：３２６４１
研究種目：若手研究
研究期間：2019～2022
課題番号：１９Ｋ１２９７２

研究課題名（和文）イギリスのプラトン主義の系譜―バークリとケンブリッジ・プラトニストの比較研究

研究課題名（英文）Platonism in British Philosophy; Berkeley and Cudworth

研究代表者
竹中　真也（TAKENAKA, Shinya）

中央大学・人文科学研究所・客員研究員

研究者番号：５０８１６９０７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,900,000円

研究成果の概要（和文）：従来、１７、１８世紀におけるイギリスの哲学史研究は、経験論に焦点が当てられ、ロック、バークリ、ヒュームの三者がひとつの哲学的連続性のある哲学者とされてきた。しかし本研究は、それとは別に、キリスト教的プラトン主義の流れがイギリスの哲学にありうる可能性を明らかにした。ケンブリッジ・プラトン主義者の代表的人物レイフ・カドワース、バークリへという流れがそれである。こうしてイギリスの哲学史に新たな観点をもたらした。また本研究の成果は、１７、１８世紀の大陸の哲学の形而上学との比較という可能性を与え、１８，１９世紀のイギリス文学へ影響を考察する立脚点を与えた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究は、イングランド、アイルランドの代表的な哲学者の研究であるが、その研究成果であるプラトン主義は、同時代のフランスやドイツの哲学研究との対話を生むきっかけとなる内容をそなえている。この点で、地理的な差異を超えた哲学史研究を進展させ、相互に対して有意義な情報の交換の場を作ることができる。また、バークリにかんする研究成果はわが国ではきわめて少なく、彼の形而上学にいたっては集中的にそれを吟味した研究はさらに少ない。カドワースだけを主題とした研究論文も単著も、管見では、きわめて少ない。こうした状況において、本研究は、わが国の哲学研究の空白地帯を埋める役目を果たしている。

研究成果の概要（英文）：In the study of British philosophy during the 17th and 18th centuries, there has been a prevailing focus on empiricism, with Locke, Berkeley, and Hume regarded as part of a unified philosophical lineage. However, this research has unveiled a Christian Platonist tradition within British philosophy, tracing from Cudworth, a prominent figure among the Cambridge Platonists, to Berkeley. This fresh perspective provides a new vantage point to explore the history of British philosophy. Moreover, these findings offer an opportunity for a comparative analysis of metaphysics between Continental Philosophy and British philosophy. Furthermore, this research establishes a robust framework to investigate the intricate influence exerted on 18th and 19th-century British literature.

研究分野：哲学

キーワード：バークリ　カドワース　プラトン主義　生得思念　イデア　自由意志　神

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

バークリ研究は、標準的テキストとされるルース・ジェサップ版の全集（1948-1957）が刊行されて以来、科学、神学、倫理学、哲学の方面で多くの研究成果が見られるようになった。とはいえ、この古典的研究は、バークリが物質を否定し経験を重視したという経験論的観点や、２０世紀に哲学研究の主題とされた言語論や科学論との関連から、バークリ哲学を評価するものであった。

しかし、こうした潮流に対して、２１世紀に入ると、バークリにおけるプラトン主義的形而上学の見直しが国際的に行われるようになった。これは、バークリ最晩年の著作『サイリス』を読解することによって、彼の哲学全体をあらためて問い直す試みであるとも言うことができる。このように、海外の研究者たちが形而上学に関してさまざまな成果をあげている。しかし我が国においては、そうした研究がほぼおこなわれていないのが現状である。バークリ研究者もけっして多くはない。また、イギリスの代表的なプラトン主義者であるケンブリッジ・プラトニストの研究もごく少数に限られている。

２．研究の目的

本研究は、近年の国際的な潮流に棹さして、バークリ哲学におけるプラトン主義的形而上学を解明することを主要課題とする。具体的な問いとしては、バークリにおけるイデアとはいかなるもので、それと精神的実体との関係はいかなるものか、その形而上学は、当時のケンブリッジ・プラトニストの代表格レイフ・カドワースのプラトン主義といかなる異同があるのか、である。この検討の結果、１７世紀から１８世紀における哲学史に新たな潮流を見いだす。本研究の成果は、哲学史上の空白地帯を埋めることにもなり、イギリス哲学研究の足掛かりとなる。

３．研究の方法

一次テキストの翻訳を進める。また、そのさい、関連する文献を収集し、それらを読解し整理したうえで、テキストの内容を吟味していく。また、成果を口頭発表や論文をつうじて、研究成果を公表し、研究者たちから意見をいただき、自分の解釈を深めていく。

４．研究成果

<u>バークリの最晩年の著作『サイリス』における形而上学の解明</u>

まず『サイリス』において、生得思念説すなわちイデア論を提示している箇所を分析した。これは、ロックとバークリを明確に分けることになる。ロックは、人間の経験を記述する立場をとり、生得的思念はないと述べた。そのために一般的知識は抽象に基づくという概念形成論を展開していた。これに対して、バークリは生得的思念を認めて、それをイデア論で説明している。そのさいバークリは、プラトンの言うイデアが人間の作り出す観念（混合様相や抽象一般観念）ではないと断言している。バークリはロックによる生得思念批判に対抗し、精神の活動とイデアの一体性を打ち出している。このようにして、バークリによるイデアの説明を明らかにした。

さらに、『サイリス』の分析に基づいて、バークリ哲学における人間と神の関係を整理して提示した。その関係は、ルネサンス期に形成された古代神学の影響のもと、人間と神をミクロコスモスとマクロコスモスと見るものである。すなわち、人間の「魂」、「知性」、小文字の「一（one）」という三つは、この宇宙を形成している神の「世界霊魂」、「知性」、大文字の「一（0ne）」と相似的である。こうして三位一体を意識しながら、人間と神の類似性、人間が神の似姿であることが説明されていた。バークリの依拠する立場は、ルネサンス期の遺産によることが明らかされた。

<u>カドワースの哲学における基本的な立場について</u>

カドワースの認識論を明らかにすることによって、彼とバークリの思念との類似性を見いだすことを目指した。まずはわれわれの認識は感覚から始まるが、感覚が生じるさいの説明は原子論に基づいている。例えば星を見るとき、光の粒子がわれわれの目に衝突し、その運動がわれわれの神経に伝達され、精神に到達する。しかし感覚だけであれば、「それが何であるか」が分からない混濁した知覚にとどまる。われわれは混濁した知覚を受動的にもつにすぎない。しかしながら、そうした受動状態に対して、われわれの精神が能動的に働きかける。これによって、われわれの知性認識が成立する。そのさい、抽象ではなく、われわれは生得的思念を想起する。とはいえ、バークリと異なり、カドワースはわれわれが神にいわばアクセスすることによって、普遍的な知識を手に入れると言う。これによって、カドワースの立場は、バークリのそれとは異なる。

また、カドワースの人間論を吟味した。彼は、知性の働きを高く評価しながらも、意志に対しても詳細な分析を加えていた。それは自由意志に関わるが、人間が全的に堕落した以上、み

ずから善を選び取ろうという傾向性を有するとしても、そちらに向かうことは容易ではない。そこでそのために神の恵みが必要になる。このように善への傾向性をもちながらも、人間は神の補助によって善へと現実に向かうようになる。こうした神学的な議論がカドワースの自由意志論の背景には控えているのであり、この点は、バークリの哲学には見いだされない。

以上のように、バークリとカドワースについてわが国で研究の進展していない著作や分野を明らかにしたことで、イギリスの哲学史に新たな系譜の端緒が見えてくる。従来、１７、１８世紀のイギリスの哲学は古典的経験論と呼称されてきた。しかし、本研究によって、カドワースとバークリの間には、キリスト教的なプラトン主義という観点でのつながりが見出された。これは従来の固定化された通念に対して、新たな哲学史を再構築する機縁となるとも言える。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計7件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　5件）

１．著者名 竹中真也	４．巻 65
２．論文標題 「カドワースにおける人間論」	５．発行年 2023年
３．雑誌名 『紀要ー哲学』	６．最初と最後の頁 77-93
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 竹中真也	４．巻 64
２．論文標題 「カドワースとバークリにおける「思念」について」	５．発行年 2022年
３．雑誌名 『紀要ー哲学』	６．最初と最後の頁 59-75
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 竹中真也	４．巻 63
２．論文標題 「「思念」と「イデア」――一八世紀におけるプラトン主義の受容の一側面」	５．発行年 2021年
３．雑誌名 『紀要ー哲学』	６．最初と最後の頁 75－94
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 竹中真也	４．巻 51
２．論文標題 「『サイリス』の「一」に関するひとつの解釈」	５．発行年 2021年
３．雑誌名 『武蔵野美術大学 研究紀要』	６．最初と最後の頁 17－25
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 竹中真也	4．巻 62
2．論文標題 「精神の「一」性について」	5．発行年 2020年
3．雑誌名 『紀要　哲学』	6．最初と最後の頁 159-174
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計7件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 竹中真也
2．発表標題 第一報告「カドワースにおける知性と情念」
3．学会等名 第46回日本イギリス哲学会大会
4．発表年 2022年

1．発表者名 竹中真也
2．発表標題 「カドワースの人間観――理性のありかたによせて――」
3．学会等名 第24回イングランド啓蒙研究会
4．発表年 2022年

1．発表者名 竹中真也
2．発表標題 「カドワースとバークリにおける「思念」について」
3．学会等名 第45回日本イギリス哲学会大会
4．発表年 2021年

１．発表者名 竹中真也
２．発表標題 「バークリの「思念」の解釈――カドワースの生得説を手掛かりにして」
３．学会等名 第19回イングランド啓蒙研究会
４．発表年 2021年

１．発表者名 竹中真也
２．発表標題 第2報告「カドワースにおける理性と意志について」
３．学会等名 第44回日本イギリス哲学会（セッションⅡ＜17世紀イングランドにおける啓蒙思想の萌芽＞）
４．発表年 2021年

１．発表者名 竹中真也
２．発表標題 「カドワースにおけるト・ヘゲモニコンについて」
３．学会等名 第12回イングランド啓蒙研究会
４．発表年 2020年

１．発表者名 竹中真也
２．発表標題 「18世紀イギリスにおけるプラトン主義の一側面――『サイリス』を手掛かりにして」
３．学会等名 新プラトン主義協会
４．発表年 2019年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関